

## 滑稽趣味 (十九)

・黒田清輝氏談  
・評判の大漁節  
・舌振して恐縮

事新しく記さずとも、世間に知れた洋畫の泰斗。

寫眞に偽の無い豊かなる頬、泰然とした態度、笑顔になつて滑稽談を試みる處、誠に天真爛漫である。

私は性來甚だ音樂の趣味に乏しい、別けても三味線と來ては大の禁物、能く宴會などで「夫れを疑ふ事かいな……」とか、何んとか一寸とした御座附でも始まらうものなら、急に蟲囓が走ると云ふ有様です、

處が或る時銚子へ行つて、唯ある宿屋へ泊りますと、何時とはなしに離れ座敷から、意氣な音締が聞えて來て、若い藝者が莫迦に佳い聲で唄ひ出した、

間もなく、大漁唄くくと云ふ聲がして、哄つと一しきり笑ひさゞめくと、今度は同じやうな旋律の長い唄が、盛んに繰り返しく唄はれて、一座も何とも云へぬ陽氣になつた、全然手に取るやう、

此時偶と思ひ出したのは、銚子には大漁唄と云ふのが有つて、夫れが却々の名物であると云ふ事です、成る程あれが大漁唄だな、と何と善い事でも聞いたやうに感じ入つて居りましたが、翌る日東京へ歸ると何うも一遍此唄の眞似がして見度くて堪らない、俄か仕込の通を氣取つて頻りに時節を待つて居た、

間もなく或る晩大勢の集合する宴會が有つて、行つて見ると、お詠向の藝者なるものも參つて居る仍で此時だと

大に意氣込み少々は反身になつて、時に諸君、諸君は大漁唄を御存じあるまい、粹人雲の如しと雖ども此唄はかりはよもやくと、申しますと列座の面々顔を見合せて返答がないすると、小さな妓こしもが右からも左からも攻め寄せて、是非聞かせると矢の催促です。最う斯うなると、騎虎の勢、思ひ切つて聲を大きく

「今鳴る喇叭は八時半」

と始めると、一座の連中が哄こつと笑ふ、變挺だとは思つたが、屹度僕の顔附が可笑しいからだと思ひかへして、

「早く歸らにや重營倉——」

と、一段他處行よそゆきの聲をサラケ出すと、蔭に居た婆さん藝者が三味線追つ取てツ、ンと入れる、撥音が冴さびて一座ワウツと云ふ大騒ぎ、

一くさり濟んで、諸君今のが大漁唄なんだよ、と披露すると、此時遅し一隅から、ヘンいけ好かない喇叭節だわ、と甲走つた聲がして、忽ち又鯨波の聲、ワウツと云ふ氣配、

曷なんぞ知らん大漁唄と思つて居たのは、全く愚にもつかぬ喇叭節なるもので有つたのです、ハ、ハ、ハ、ツ其時の僕の顔かほは何様どんなでしたらう、後に聞くと

「一つとせー一番いつ、に積み込んで、川口押し込む大やこい、コノ大漁船——」

と云ふ數へ唄が、所謂大漁唄なるものであつたのです、

黒田が大漁節と勘違いした「喇叭節」は日露戦争後に生まれた俗唄で、最盛期は明治四〇年代、大正時代に入ってもしきりにうたわれたという。もとも一般的に知られ、うたいつがれた文句は次の通り。

へ倒れし戦友抱き起し、耳に口あて名を呼べば、につこり笑ふて眼に涙、万歳唱ふも胸の内、トコトツトツト

へ今鳴る時計は八時半、それに遅れりや重営倉、今度の日曜がないじやなし、放せ軍刀に錆がつく、トコトツトツト